修士論文概要

障害児に関わる人々の意識と態度が
子どもの学びへの参加に与えうる影響に関する研究
－マレーシア・クダ州の事例から

植山　明日香

1.　研究の目的と方法

本研究の問題意識は、教育の場において障害児が実質的に学ぶ機会が保障されているかに着目する必要性を感じたこと、および、障害児に関わる人々の意識や態度に関して議論される機会は少ないのではないかという疑問点から構成されている。

マレーシアは、国際条約への批准や国内法の改訂、ZERO REJECT POLICY という障害児の学校教育を保障する新制度によって、全ての障害児が学校に入学できる仕組みを構築している。政府が行う障害児の教育に対する取り組みは、学校に在籍することを重視する風潮にあり、実際に学びへの参加が保障されているかという点に関しては十分に議論されていない。筆者が青年海外協力隊としてマレーシアで活動している際に、学校や Pemulihan Dalam Komuniti(Community Based Rehabilitation：地域に根差したリハビリテーション 以下、PDK)に通う障害児が、授業やアクティビティを行う機会がない場面を見ることがあった。この状況から、学校や PDK に在籍し、通っていることが必ずしも障害児の学びが保障された状態であるとは言えないのではないか、と疑問が生じた。そこで、障害児の学びへの参加の実態に着目する必要があるのではないかと考えた。

マレーシアの学校や PDK において、障害児が授業やアクティビティに参加できない原因は、物理的、制度的要因によるものという見解が多く、障害児に関わる教員や職員の意識や態度に対して言及されることはほとんどなかった。Siti Fatimah Salleh, Mustafa Che Omar[2018:258]の研究では、障害児の学びに影響を与える教員側の要因として、障害に関する知識や経験などの不足や人材育成に問題があると述べている。先行文献では、教員の指導技術面や学問的知識レベルを指摘しており、意識と態度に関する議論には及んでいなかった。そこで、障害児に関わる人々の意識と態度の要因に焦点を当てた研究とした。

以上の背景と問題意識から、本研究の目的を障害児に関わる人々のどのような意識と態度が、子どもの学びへの参加にどのような影響を与えうるかを明らかにすることとした。

本研究では、文献調査、観察および非構造化インタビューにより調査を行った。文献調査では、政府発行資料および先行研究から障害児教育に関するマレーシア政府の取り組みを整理し、歴史的変遷からマレーシアにおける教育の場を述べた。また、法律、制度の側面から障害児の教育はどのように保障されているかを分析した。

マレーシア・クダ州の学校と PDK で、観察および非構造化インタビューを実施し、事例

研究を行った。事例から、物理的、制度的、情報・文化的側面において障害児の学びへの参加に影響を与えている具体的要素を分析した。観察と非構造化インタビューによって得た情報において、障害児に関わる人々の意識と態度に焦点を当て、子どもの学びへの参加にどのような影響を与えているかを明らかにした。障害を捉える分析の枠組みは、「障害の社会モデル」を採用し、子どもの学びへの参加を捉える枠組みは、「参加」の枠組みを用いて分析を行った。

2.　論文の構成

第1章 はじめに
　第1節　研究の背景と問題の所在
　第2節　マレーシアの障害児と教育
　第3節　研究の目的
　第4節　研究の方法
　第5節　論文の構成
第2章　分析の枠組み
　第1節　障害の社会モデルの概念
　第2節　参加の概念
　第3節　本研究の分析枠組み
　第4節　まとめ
第3章　マレーシアにおける障害児への教育に関する歴史的変遷
　第1節　障害児の教育を巡る状況：政府の取り組み
　第2節　特別支援教育プログラムの概要
　第3節　PDK の概要
　第4節　障害児への教育の現状
　第5節　まとめ
第4章　マレーシア、クダ州の障害児の学びへの参加の実態
　第1節　マレーシア、クダ州の概要
　第2節　調査方法と分析手法
　第3節　調査地の概要
　第4節　障害児の学びへの参加に影響を与えうる要因
第5章　子どもの学びへの参加に影響を与えうる関係者の意識と態度
　第1節　子どもの学びへの参加に影響を与えうる関係者の意識と態度
　第2節　関係者の意識と態度が子どもの学びへの参加に与えうる影響
　第3節　まとめと考察

第６章　結論と今後の課題と展望
　第１節　結論
　第２節　今後の課題と展望
　第３節　まとめ

3.　論文の概要

本研究では、障害児に関わる人々の意識と態度に焦点を当て、障害児の実質的な学びへの参加にどのような影響を与えているかをマレーシア・クダ州の事例から明らかにした。

まず、第１章では本研究の問題意識と背景を示し、本研究の着眼点を人々の意識と態度、および、障害児の実質的な学びへの参加とすることを述べた。そして研究の目的と方法を明示した。

第２章では、本研究の分析の枠組みとして「障害の社会モデル」と「参加」を示した。「障害の社会モデル」の枠組みにより、障害の原因は社会にあるという視点で分析を行った。「参加」は、エンパワメントとインクルージョンからなる枠組みとした。子どもは権利を有する主体者であると位置付け、子どもが学びへの参加に関わる過程と、結果としてどのような状態であるかを分析した。

第３章では、障害児の教育に対するマレーシア政府の取り組みを概観し、分析をした。本論における障害児の学びの場を学校および PDK と位置付けた。歴史的背景から、PDK は学校の代替えの場となっていることが明らかとなった。そして、分析の対象を障害児に関わっている学校の教員と支援員、PDK の職員とした。

マレーシアの法律、制度の現状から、特別支援教育プログラムは障害児の能力や支援の必要性によって在籍するプログラムが決定されていることが明らかになった。法律や制度によって障害児に応じた教育が保障されていることから、次の章では実質的に学びへの参加が保障されているかという視点から分析を行った。

第４章では、学校と PDK での事例を物理的要因、制度的要因、文化・情報的要因が子どもの学びへの参加にどのような影響を与えているかを分析した。その結果、子どもの学びに影響を与える根源が物理的、制度的、文化・情報的要因である場合でも、関係者の意識と態度によって子どもの学びの可能性が拡大したり制限したりすることが示唆された。意識と態度の要因は物理的、制度的、文化・情報的要因と密接に関わっており、横断的であることが明らかとなった。

第５章では、学校と PDK での事例において、関係者の意識と態度に焦点を当てて分析をした。学校と PDK での事例および先行研究から、子どもの学びへの参加に影響を与える関係者の意識と態度を４つの視点から議論した。

１つ目は「障害の捉え方」である。関係者が、障害は「個人の身体機能の問題」と捉えている場合、子どもが作業や活動を行う機会を阻害し、学びの可能性は制限された状態であった。子どもは、身体機能の問題によって活動ができない者として過ごしていた。一方、関係

者が「子どもを取り巻く環境が問題」と捉えている場合、環境にある問題点を改善し、子どもが活動を行う機会は保障されていた。子どもはできる者として主体的に活動を行なっていた。

2つ目は「価値判断の基準」である。関係者が、能力基準を設けている場合、子どもの能力が活動にふさわしいかを選別することで、活動や作業を行う機会を阻害していた。子どもは活動に組み込まれずに、能力がない存在として過ごしていた。一方、関係者が一人一人は異なることを前提としている場合、子どもの実態に応じて対応しており、子どもが活動を行う機会は保障されていた。子どもの差異は否定されることなく、主体的に活動を行なっていた。

3つ目は「立場の位置づけ」である。関係者が子どもは従うべき立場と捉えている場合、関係者は一方的に指導や指示を出しており、子どもが意思表示や主体的に行動する機会は制限された状態であった。子どもの意思は尊重されず、関係者が決めた行動をしていた。一方、関係者が子どもは主体と捉える場合、関係者は子どもの行動や意思に応じて対応をしており、子どもには自己決定や意思表示をする機会があり、子どもの意思が尊重されている状態であった。

4つ目は「子どもとの関わり方」である。関係者が子どもに必要な支援を決めている場合、関係者は固定的な支援を繰り返し行っており、子どもの意思表示や自己決定の機会が制限された状態であった。子どもは支援を受ける存在であり、関係者によって管理されている状態であった。一方、関係者が柔軟に対応している場合には、子どもの行動や意思を汲み取って対応をしていた。子どもの自己決定や意思によって主体的に活動を行なっていた。

事例分析から、関係者の「障害の捉え方」、「価値判断の基準」、「立場の位置づけ」、「子どもとの関わり方」は、子どもの学びへの参加の制限や拡大に影響することが明らかになった。

第5章における事例分析の結果から2つの視点を示した。1つ目は、障害児の実質的な学びへの参加状態にも目を向ける必要があるということ、2つ目は、関係者の意識と態度は障害児の学びのへの参加の制限や拡大に関わる重要な要素の一つであるということを述べた。

第6章では、意識と態度の側面から障害児の学びへの参加の拡大につなげるアプローチの一つとして、障害平等研修を取り上げた。現在、マレーシアで実施されている障害平等研修の課題として、実施回数と参加者の制限を取り上げた。そして今後の展望として、障害平等研修を通して障害は社会側の問題であるという視点の構築をすることで、意識と態度の側面による障害児の学びへの参加の拡大だけではなく、物理的、制度的、情報・文化的要因へも働きかける行動力につながることを期待すると述べた。

<参考文献>

・Siti Fatimah Salleh, Mustafa Che Omar[2018] “Masalah Pengajaran Guru Dalam Program Pendidikan Inklusif di Sekolah” Asian People Journal, Vol.1, No.2, pp.243-263